「小さな親切」とAI

人工知能

～はがきキャンペーンと作文コンクールの目指すもの～

最近ではAI（人工知能）が急速に進化し、暮らしのさまざまな場面で活用されるようになってきました。文章作成もその一つで、条件を与えただけで瞬時に整った文章を生み出すことができます。

しかし、「小さな親切」運動本部が主催する「はがきキャンペーン（エッセイコンテスト）」や「作文コンクール」では、AIによる文章生成ツールを使った作品は「審査の対象外」としています。

それは両コンクールにおいて最も大切にしているのは、自らの体験を自分の言葉で綴ること。それが「心を育てる」ことに繋がると考えているからです。

AIが書いた文章はどっちだ!?

とはいえ、AIが書いた文章を私たちは見抜けるでしょうか。そこで、高校生以上を対象に600字以内のエッセイを募集している「はがきキャンペーン」の入賞作品をもとに、シチュエーションや筆者の年齢・性別などをAIに指示して文章を書かせてみました。次の2作品のうち、どちらがAIか人の手によるものか、ぜひ想像しながら読んでみてください。

A 「夕暮れの受話器」

駅前のロータリー、オレンジに染まる空の下、赤い公衆電話は異様な熱気に包まれていた。何十人もの人だかりの中心で、一人の初老の男性が受話器を握りしめている。その背中からは、嗚咽が漏れ聞こえてくる。

普段は無関心な東京の群衆も、今日のこの空間では誰もが固唾を飲んで見守っている。

すると、白髪の小柄な女性がゆっくりと人垣をかき分け、男性の隣に立った。彼女は何も言わず、ただ優しく、白いハンカチを差し出した。

男性は一瞬、はっとしたように顔を上げ、濡れた目でそのハンカチを受け取った。言葉はなくとも、そこには確かな温かい交流があった。

こんなにも多くの人が行き交う場所で、こんなにも人間らしい瞬間に立ち会えるとは。冷たいと思っていた東京の夕暮れが、少しだけ、温かく感じられた。

B 「おばあさんのハンカチ」

とある小さな駅でのことでした。夕方のラッシュ時。帰宅を急ぐ人たちが改札付近に群がっています。群衆は赤い公衆電話を囲んでいるのです。

そこには中年の男性が泣きながら電話をしていました。その男性は電話を抱きかかえて象のように号泣しているのです。よほど悲しいことがあったと見えます。あるいは大切な人が亡くなられた、その知らせを受けたのかもしれません。

彼がひとしきり泣くと、腰の曲がったおばあさんが赤電話に近づきました。周りにいた人々は、おばあさんがどうするものかと見守ります。

するとおばあさんは、懐から白いハンカチを取り出して、うつむいている人の手に持たせました。

「涙をふいてな。それからまたお泣き」

そう言ってどこかへ消えていきました。

【AIへの指示内容】

- 夕方の駅付近にある赤い公衆電話を大勢の人が囲んでいる
- 泣きながら電話で話す中年男性がいた
- おばあさんが近づいてきて、男性に白いハンカチを渡した
- 作者はこれを見ていた29歳男性
- 心あたたまる話に
- タイトル15字以内、本文350字以内

さて、AIが書いたのはどちらか分かりましたか？　正解は、【A】の「夕暮れの受話器」。【B】は実際の入賞作品です。【A】のエッセイは情景が整然と描かれていて、読みやすい文章ですので、見抜けなかった方も多いかもしれません。

しかし、どこかまとまりすぎていて、登場人物の感情や筆者自身の思いが伝わりにくい印象があります。

一方で、【B】の作品には「象のように号泣していた」といった筆者独自の表現があり、泣いている男性を見て「よほど悲しいことがあったのだろう」と、相手の心情を想像し、寄り添っているのがAIとの大きな違いです。

そして最後に、「涙をふいてな。それからまたお泣き」とハンカチを渡すおばあさんの言葉。相手へのさりげない優しさが凝縮され、思わずおばあさんの人生にも思いを巡らせたくなるような一言は、まさに生きた人間から発せられた思いやり溢れる言葉です。

全体的に淡々とした文章ではあるものの、それがかえって筆者特有の「味」にも感じられます。

人が書いた文章の魅力

小中学生を対象とする「作文コンクール」でも、同じような検証をしてみたところ、AIが書いた作品は、起承転結がしっかりとしていて、違和感なくすらすらと読むことができ、その精度の高さに少々驚かされました。

しかし、「はがきキャンペーン」と同様、筆者独自の表現、臨場感のある生き生きとした会話や言葉、心の動きの描写などは、AIにはまだまだ難し

い部分もあると感じました。特に子どもは、印象に残ったできごとや心に強く思ったことを中心に書く傾向があるので、起承転結がはっきりせず、つたなく感じる表現もあります。しかし、「その子がどう感じたか」「どんな気持ちで体験を振り返ったか」を素直に綴った作品は読み手に伝わり、「うまい文章」よりも、心に響くのです。

それが自らの体験に裏打ちされた言葉の力、リアルな人間が書く文章の魅力なのではないでしょうか。

＊＊＊

「小さな親切」運動本部の両コンクールが大切にしているのは、書き手の心が伝わる作品です。筆者が自らの体験を振り返り、自分の言葉で表現することで、親切や思いやりの大切さに気づく。そして、その気づきが「心の栄養」となって自らの心を育てます。

AI全盛の時代だからこそ、文章を書く意義、人が書く文章の温かさや力強さを、改めて感じていただきたいと考えています。

AIに「小さな親切」はできるのか

最後に、AIをテーマにした作品を紹介します。筆者は、福岡県北九州市の中学生。生まれたときからパソコンやインターネットがある「デジタルネイティブ」と呼ばれる世代の彼らが、AIと人間を比較し、人のすばらしさを伝えてくれました。

ぜひ、お読みください。

第49回〈2024年度〉「小さな親切」運動本部賞

「ちょっとした親切」

北九州市立洞北中学校　1年　野田統希

（一部要約・学年は受賞時）

近年AIは飛躍的な進化を遂げ、人間の能力を上回る時代になってきている。将来、人間の仕事はAIに取って代わられ、人間は何もしなくてよい時代が来ると言われている。しかし、AIがすべてにおいて人間を上回るわけではなく、苦手なこともある。それは、人の感情を正確に理解することだ。

例えば「もう結構です」という言葉も、声の大きさや表情によって怒りや諦めなど何通りもの意味を持つ。人間同士の会話には一つの言葉でも意味が正反対になることがあるが、果たしてAIがその違いを正確に判断できるだろうか。

僕が中学に入ったころ、母の車に乗っていたときのこと。渋滞中、脇道から入れず困っている車がいたが、誰も道を譲らなかった。母は速度を落とし、その車を入れてあげた。そして、「いま譲った人がまた別のところで誰かに譲ればいいね」と言った。親切にされれば嬉しくなり、優しい気持ちが生まれる。その優しさが広がれば「親切の輪」となり、世の中はもっとすばらしくなると思う。

AIの自動運転は正確にルールを守るが、母のように「譲る」判断はしないだろう。ルールを破ることはAIにとってはエラーであり、不良品とされる。しかし人間にとっては、そのエラーこそが思いやりある優しい運転であり、人の心を温かくする。世界中の科学者が研究しても、人の気持ちを汲み取り、ちょっとした親切を実行できるAIは作れないと思う。

僕には賢いAIを作る頭脳はないけれど、母のように「小さな親切」をすることならできる。「ちょっとした親切」はその場の空気を読み取り、相手の気持ちを正しく汲み取れる人間にしかできない。これからは僕がこの親切の輪を広げ、思いやりあふれる優しい社会を作っていきたい。